沢田英史さんを偲んで

鳴門教育大学　　幾田　伸司

神戸に住んでいる私は、毎日、明石海峡大橋を渡って四国に通っている。長さが四キロある、世界一の吊り橋と言われる巨大な橋である。

沢田英史さんのことである。沢田さんは私の大学院の2年先輩だった。残念ながら院で一緒に勉強させていただいたことはなく、先生方が舌を巻くほど緻密で圧巻だったと言われる演習でのご発表ぶりは、伝説として伺った。沢田さんとお会いする機会は、ほとんどが両輪の会だったと思う。私の記憶の中の沢田さんは、いつも温和でにこにこしている。その後、両輪の会が閉じられ、沢田さんも歌人としてお仕事をされるようになった。ご活躍はお聞きしていたが、お会いする機会はほとんどなくなった。賀状は交換していたが、最後にお会いしてから十年以上になるだろう。

最近の沢田さんを存じ上げないこともあり、沢田さんの訃報をお聞きしたときも、実感がわかなかった。だから、この小文を書こうとして、改めて沢田さんのことをあれこれと考えてみた。すると気がついたことがある。よむいか通信にしても、たいやき作文にしても、私は当たり前のものとして沢田さんがされた実践を授業作りに使っているのである。その実践に沢田英史という署名があることはもちろん知っているのだが、それを引用したり紹介したりしている感覚はない。国語の授業で使う当然の発想や方法として、沢田さんの発想や方法を使っている。

沢田さんが遺してくださったものは大きい。沢田さんの歌に惹かれ、惜しむ方もいるだろう。沢田さんのお人柄を懐かしみ、悼む方もいるだろう。また、私のように、沢田さんが残してくださった発想や方法を自分の考え方の一部として取り込んでしまっている者もいる。そんなことを考えていると、私にとっての沢田さんは、明石海峡大橋のようなものだと思った。類を見ない建造物であることも、その景観のすばらしさも知っているが、毎日の生活の中でまったくそのことを意識しないでただ使っているのである。沢田さんが教えてくださったことは、私の日常の一部として、私に残されている。

そのような受け取り方も、沢田さんであれば許してくださるだろうと思います。沢田英史さんのご冥福を心よりお祈りします。